

## 中世的「宗」及び近世的「宗」の意味

— 浄土宗門の場合から考えて —

平 祐 史

## (一)

最近 浄土宗学及び宗史学関係において、元祖法然上人の浄土宗開宗の年時等の問題をめぐつて種々の見解が多々発表<sup>①</sup>され興味ある論戦が展開されており一仏教史学徒として傾聴せずにはおられないものがある。私は今、ここにおいて此の開宗をめぐる論戦の渦中にあえて臨もうなどという勇氣は毫ももたないが、ただ現在考え続けている近世浄土宗門形成の展開過程を考える上に、中世初頭の法然教団のもつ宗の意味と性格、更に、近世の教団のもつ宗の意味と性格、此の二つの教団の意味と性格は全く異つた類型を提供してくれるのではないかと考え、同時に法然の中世の教団の性格を明瞭に把握することは近世教団の特異な性格を位地ずけることが出来るのではないかと私かに考えたもので法然教団—中世の浄土宗教団—の人々の宗に対する考えにふれて見、更に近世教団との比較に供したい。

## (二)

我今浄土宗を立つる趣は凡夫の往生を示さんが為也。

法然の教団は、右に掲げた「宗」に讃同する多数の門弟、信者によつて具体化された教団であつて、それは我々が最も一般的に想い起す仏教各宗派の教団、或はキリスト教、神道、諸々の宗教団体、又は現今、布かれてゐる宗教法人法に基づいて抱括關係をもつ宗教団体等の組織的教団を意味する「宗」とは少しく趣きを異にする性格の教団と考えねばならない。法然の浄土門歸入を一般的に浄土宗の開創とし天台宗よりの独立と見做なすことは危険であらうし、それは法然一個人の宗教的自覺の経験にすぎず、教団形成乃至教団組織の意圖と見ることは出来ないものと考えられる②。何故なら、法然の教団は頭初から、例えば天台宗、真言宗のように特定の莊園經濟を基盤として、あまたの堂塔伽藍をつらねた然も宣教を勸許された教団ではなく、浄土宗という宗名を掲げてはいるが何の經濟的、政治的基盤もたない單なる宗——イデオロギー——を標榜する意味の教団にすぎないと受けとれる。

かかる意味を精神的に裏付ける資料として、「没後起請文③」を見ると、

(前略) 遺弟同法等全不可群会一処者也。其故何者 雖復似和合 集則起鬭諍 此言誠哉。甚可謹慎 若然者我法等 於我没後 各住各居各別住不如不会 鬭諍之基由集会之故也。羨我弟子同法等 当各閑住本在之草菴 苦可祈我新生之蓮台 努々莫群居一所 致諍論起忿怒

(下略)

と、又

孝養のために精舎建立のいとなみをなすことなかれ。心ざしあらばをのをの群集せず念仏して恩を報すべし。もし群集あれば鬭諍の因縁なり⑤。(傍点筆者)

と見られるように、一処に群会することは「雖復似和合集則起鬭諍」と請誠されている。この

一事は明らかに組織集団的な教団を創らうとする意図をもつものではなく、あくまでも宗に生きようとし、これによつて個人の宗教的自覚に到らうとする意味の浄土宗に外ならない。

かく云う法然の教団を形式的に構成する格骨は何であろうかとき、同じく「没後起請文」において見られる弟子達への遺産分配に関する一条であるが、ここで法然の遺産について抜書して見ると、

黒谷本房寢殿 雑舎、白川本房寢殿 雑舎、坂下藺一所、洛中地一所、吉水中房本在西、山広谷、高畑地一所但売之時半直与之

吉水東新房、六条敷地、白川辺一屋価値与弓之、吉水西旧房、雑舎、覚悟房、持仏堂

以上が土地及建物等の動産、不動産であり、此の外遺品として、

本尊三尺彌陀立像定朝、聖教摺字六卷等

が列举されている。そして「此外無房舎、亦無領地⑥」と云われている。従つて法然のもつ動

産及び不動産はこれが全てであり、此の坊舎を中心に法然の教団が形成されていたとも考えられるのである。こうした状態から考え合わせて当時の旧仏教系の教団の概念から見れば恐らくそれは組織的な教団とは見做されなかつたのは事実であつて、それは遁世者や聖僧の如き人々によつて構成される自由教団に外ならない。これについて田村円澄氏も「法然は天台やその他の宗派の外に浄土宗という教団を組織しようと考えていたとは思われない。このような教団は、多くの莊園によつて維持せられ、また世俗的な勢力を中核として居り、仏教本来の思想から遠ざかりつつあつた。仏法の真実を求める人たちによつて、いわゆる遁世が行われねばならなかつたのも、教団の世俗化に対する反抗に基づく点が多い。しかしそれらの遁世者——たとえば良忍や叡空や顕真などの聖——は、現実の教団（叡山）を改革しようとしたのではなく、また

現実の教団の外に、新しい一つの教団を創立しようとしたものでもない。つまり彼等の宗教生活は、その経済生活と共に、天台教団の内部において、継続せられて行つたのである<sup>①</sup>。」と述べられ法然の教団が組織的な且つ世俗的教団でなかつたことを力説されている。こうした教団形成は法然の教団に限つたものではなく法然の門下に於いて形成せられた教団においても同様なことが知られている。例えば信空の白川門徒、湛空の嵯峨門徒、親鸞の大谷門徒など云うように門徒の呼称を用いる教団、或は親鸞の門下に於いても同様地名によつて、高田門徒、鹿島門徒等の様に門徒の語を用い、日蓮の門下にも富士門徒などと云う様に、此の門徒の語は門弟と同義語であつて一師の教え、或はそのイデオロギーを受け伝えた信仰集団を意味するものと考えられる。又、念仏衆とか、或は一遍は同信者を時衆と呼び、日蓮宗徒は法華衆と呼ばれたように同一信仰者の集団的な宗教生活を営む所に生ずる集団をかく指すのであらうと考えられる。

この様に、呼称される教団は、法然の教団と同じ類型に加えることが出来るものと考えられるし、いずれにおいても確実な経済的基盤に立脚した世俗的教団の意味ではなく、又、イデオロギー的には独立した教団であるかも知れないが、形式的には旧教団から独立した教団ではなく、旧教団の内部において行われているに過ぎない形態の教団と考えられる。ともあれ、法然の教団をはじめとして、中世に興つた教団のもつ性格とその意味は、人格及びその宗中心の信仰集団の「宗」を意味したもので、あたかも釈尊教団において見られた所謂僧伽的形態に似たものと云い得るであらう。

こうした宗形態は中世を通じて、尙浄土宗において継承されていたことは事実であつて、虎

関が浄土宗を「寓宗」「附庸宗」と侮蔑し、独立教団と見做されなかつたことにおいても考え合はされるであらう。

### (三)

当院之事為浄土一宗之本寺之旨後柏原院宸翰等明白也 ⑧

建暦二年正月 臨終の床に臥された法然は、「予が遺跡は諸州にあるべし。(中略)賤男賤女の柴の戸 海人漁人の葦の笠屋に至るまで、念仏を修せん砌は、皆是我遺跡なるべし。」と、加うるに「群集あれば鬭争の因縁」と遺戒された法然の教団も、漸次中世の宗形態を脱皮し、前に掲げるように一宗の本寺を制定しなければならぬ形式的、換言すれば世俗的教団へ移行しなければならなかつた。かかる中世の遁世者達や聖の類によつてつくられた自由教団から世俗的教団への形成期は近世幕藩体制の成立期と期を同じくすることに注目したい。全ての仏教教団は近世の新しい政治指導者によつて、つくられた他律的な宗教法の要求する「寺院国家安靜依之為御祈願」⑨「王法仏法御兼帯大切之御掟法 候」⑩と云う精神に基づく教団でなければその成立を許容されなかつたし、それは完全に幕藩体制に組みしかれた教団であらねばならなかつた。同時にその教団は、特定の寺院を一宗の本寺と定め一宗の宗を信奉する寺院を組織的に総合する所謂本末関係と云う特異な包括関係を組織する教団となり、幕藩体制の機構の一部分として、その社会性を備えるに至つた⑪。

法然の遺戒にもかかわらず浄土宗教団が一宗の本山を定め、八千余ヶ寺を有する教団の中核

となつて組織的宗形態をつくりあげたのは、単に宗祖の人格と教法に対する法然末徒の追慕の念だけがかくせしめたのではなくして、後期封建社会と云う特異な政治社会機構がかくせしたものと云うことが出来る。それは、俗権に追隨する世俗的教権の姿であつて、教権の自由と、独立を許されない場に呼吸する教団の悲劇でもあつた。

#### (四)

中世における法然の教団と、近世の浄土宗教団とを比較するとき、宗の形態とその規模においても格段の異いがある。たとえ小さな教団であつても法然はその門弟と共に幾多の法難をば克服し、たえしのび自からの教法を守りそれによつて、自己の宗教的自覺に到らんとする心的な教団であつた。これに対して近世の教団は、俗権に墮し、個人の宗教的自覺よりも国家權力を至上とし、その安穩ならんことを祈願することによつて保障される教団であつたことに吾々は注目せざるを得ないのである。こうした所に中世的「宗」の意味と近世的「宗」のもつ意味が精神的に相異するものとして考えられるのである。

(おことわり) 甚だ詳細を欠いた論であるがいずれ稿を改めて詳細な報告にまとめて見たい。

#### 註

- ① 坪井俊映稿「法然上人の浄土開宗に関する諸問題」参照(浄土学研究紀要才七号)
- ② 田村円澄著「法然上人伝の研究」九六頁参照

③ 「没後起請文」の法然真偽選に関して、田村氏は法然没後の偽作と考えられるとされ、（法然上人伝の研究）、三田全信氏は、法然が視力衰退の為、口述されたものを門弟が執筆したもの（浄土宗史の諸問題）であるとしておられる。いずれにおいても法然滅後より時代の下るものではないと考えたのでとりあげたものである。

④ 石井教道編「新修法然上人全集」七八三頁

⑤ 「四八巻伝」三九 石井氏（前掲書）七二六頁

⑥ ④に同じ

⑦ 田村円澄氏「前掲書」一〇三頁

⑧ 伊達光美著「日本宗教制度史料類聚考」三一九頁上

天正三年九月廿五日付左中弁より知恩院住寺法誉上人へあてたもの

⑨ ⑩ 「諸寺院条目」貞享四年十月（伊達光美著「前掲書」一八〇頁）

⑪ 拙稿「享保の改革と浄土宗団」（仏教文化研究、6・7号）、「封建君主と仏教」（浄土宗研究紀要才七号）「浄土宗の近世化について」（仏大研究紀要才三十五号）等において後期封建制下における浄土宗の立場をのべておいた。